町長ひとりごと ⑤⓪

斉藤 譲

先日、作家の井上靖が亡くなった。昨年発表した「孔子」が最後の遺作となったが、数多くの著作を世に送り、わが国の文壇で確固たる地位を築き、外国からも高い評価を得て、最近では日本で川端康成に次いでノーベル文学賞候補の呼び声もあがっていた折だけに、その死は惜しまれる。井上靖は、特に歴史小説に新しい分野を拓き、独得の作風を確立して、次々と名作を発表した。この過程では、これら歴史小説を廻って、大岡昇平と一大論争をまき起こしたことも記憶に新しい。

▼私は、井上靖の作品が好きで、学生時代貪るように読み耽ったこともある。数ある彼の作品の中で、父親について語る短かいエッセイが、妙に心に残っている。彼は、父について、こんな意味のことを語るのである。

父が健在であった時は、死ということを一度も考えたことはなかった。しかし、父が死んだとたんに、眠の前に渺々たる死の海が、恐怖をともなって広がり迫ってきた。ふだんは誰でも、子供が親を越して死ぬなどということは、思ってもみないことだ。だから父の存在は、死の海の渕に立ち塞がって、子供にはそれが見えないように疵ってくれていたのである。

生あるものにとって、死は決して避けることのできない宿命である。しかし、人々は常時死と対面しては、生きてゆけない。若者には尚更のことである。子を思う親の愛には、いろいろな形があるが、存在していることこそが本当の愛であり、無言の愛だというのである。

▼近頃、わが父の背中を見る度に、このエッセイを思い出し、井上靖の父に対する思いが、自分の父への思いとなって益々深まり強まってくるのを感ずる。

本欄に度々家人のことを出すことは、恐縮であり、また家人にとっても迷惑なことであるが、敢えて今回はわが父を登場させていただきたい。

▼父は、七十二歳になるのであるが、健康に恵まれわずかばかりの農業に執念を燃やしている。元来、貧農で苦労をしてきただけに、働くことが習性となって、他にこれといった趣味も無いので、働くことが生きがい、喜びであり、

酒よ

仕事が人生の総てという人間である。だから、家の中にじっとして居られず、年中外でコツコツと動いている。他人から見れば、つまらない性分だと思うかもしれないが、本人は案外そうでもないらしい。

そんな父にも、一つの楽しみはある。それは、晩酌である。今日までの長い間には、ずい分飲んできたであろうに、未だ止まるところを知らない。寄る年波のせいか、近頃酒量は大部落ちてきたようであるが、調子づくと偶に飲み過ぎることもあるみたいだ。晩酌を楽しんでいる父の顔を見ていると、もしかしたら、この晩酌をうまくする為に、働いているのかも知れないと思われることもあるが、いつまでも長生きをして、楽しみな晩酌を続けて欲しいと密かに願っている。

▼ところで酒は、日本人の生活に欠くことはできない。うれしい、目出度いといって飲む慶事の酒。悲しみを断切る忌中の酒。切ない、やるせない思いを紛らす憂さばらしの酒など挙げれば枚挙に暇が無いほど、酒は溢れている。どうせ飲むなら、楽しい酒を飲みたいものだ。また、年が行って飲む酒は、あの若山牧水が詠むように、

白玉の歯にしみとおる
秋の夜の酒は
ひとり静かに
飲むべかりけり

といった境地で飲みたいものだ。

▼私も、立場上酒の席が多い。常に飲み過ぎないように注意はしているのであるが、時々破目を外して痛飲しては、周囲の方々からきついご忠告をいただいたりしているのであるが、はずかしながら未だこれを繰返している次第である。

▼ひとり酒は別として、相手と飲む酒には、話題という肴がいる。昨今、どの席へ出ても代り映えのしない料理が並ぶことが多い。これと同じでどこの酒席の話題も、仕事や周囲の些事が多いようである。これも結構なことではあるが、時には天下国家を論じ、文学、芸術を語る高級感のある肴も食べたいものだ。特に、これからを託する若者には、それを強く望みたい。

元町長の椎名彰先生は、よく「盃の中に、政治がある」と言われたが、今になってその心がよく理解できる。「親父みたいな酒飲みなどに、ならぬつもりがなっていた」歌謡曲の一節が、私の胸を過る。

親父多謝